０７・夢と魔法と観覧車

とある年の秋。十月二十三日、土曜日。十五時ごろ。
日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市……から車で一時間ほど行った所にあるみのり沢市。
天気は晴れ。気温は二十三度程度。
場所は、みのり沢市のテーマパーク『みのり沢スウィートフォレストパーク』。
待ちに待った七緒との初デートの日がやってきたのだ。

そう。主人公は由希乃にチケットをもらった日から、この日の為にずっと準備を重ねてきた。
まず、涼羽からは先週の土日、久我家に軟禁され、この世に存在するありとあらゆる作品のデートシーンを見せられた。
具体的には恋愛コミック、映画、アニメ、小説、ドラマ。これによって主人公はエスコートする側の立ち居振る舞いを徹底的にたたき込まれ、鑑賞後は一週間かけて、本番に向け、涼羽と練習しまくった。
次に、一人で居る時も当然、デートに向けたイメトレを重ねに重ねた。

毎日のイメトレは、毎回デート当日にとどまらずその後の生活にまで無限に続き、最終的には結婚、老後までいくのが常だった。しかし『そうだ。桐生に最高に似合うウェディングドレスの絵でも描こう』とウェディング雑誌を買いそうになったところでさすがに我に返り、以後は適切な範囲でのトレーニングに是正された。

そして由希乃からは今朝『今日は頑張ってね！』なるメッセージをいただき、ほどよいプレッシャーもいただいている。

要するに、あらゆる意味で準備万端。『これならば、まず大きな失敗は起きまい』という状態だった。

こうして主人公は、綿密に練ったプランの下、七緒との最高のデートを……。

SE1　遊園地の環境音
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【▲1　まで流し続ける】

「【とても心配そうに。主人公の顔が真っ青なので】
先輩。大丈夫ですか？」

〈主人公〉
「……お、おう……」

していなかった。
爽やかな秋の遊園地のベンチで、しなしなになって、七緒の救助を待っていた。

「【優しく、水を飲むように促す。
近くの自販機で買ってきた水のペットボトルを見せながら】
お水。買ってきましたよ」

〈主人公〉
「……あ、あぁ……桐生、マジありがとう……」

さて、完璧なプランニングをしてきたはずの主人公は、一体なぜこんな事になってしまったのか。
まず、主人公の今日の計画と実際に起きた出来事を、ダイジェストで振り返ってみよう。
（『→』から先が実際に起きた出来事。また、【】内は主人公の自己評価）

1：朝九時、地下鉄・鵠中央駅で待ち合わせ。当然十五分前には到着して、桐生をびっくりさせる。
→絶対先に着くだろと思ってニヘニヘ待ち合わせ場所に向かったら、もう桐生が切符を買って待ってた。
『せーんぱいっ❤』って不意打ちで呼ばれて、こっちがびっくりさせられちゃった。
でも、お互いこんなに早く来ちゃう位、楽しみにしてた事がわかって嬉しかった。なんだかさっそくいい雰囲気になれたし。やったぜ。【◎】

2：朝九時三十分、大通バスターミナルに到着。みのり沢までの約一時間のバス移動で楽しくおしゃべりしつつ、暗記してきた『みのり沢スウィートフォレストパークの成り立ちとその歴史』を語って、知的さをアピールする。
→すべったらどうしようかと思ったけど、桐生は全部ニコニコ聞いてくれた。好き。
その上、この時まであえて話さず温存してた『子どもの頃スイパに行った時に起きた、わたしの面白失敗談』にも、めっちゃウケてくれた。好き。ほんと好き。
でも、桐生は昨日もバイトだったわけだし、移動中は寝かせてあげた方がよかったかも……。【〇】

3：朝十時三十分、みのり沢駅に到着。ここから、スイパへ向かうバスに乗り換え。ここはもうバス券の範囲じゃないから、降車時はすばやく小銭を出して、スマートなわたしを演出する。

→すばやく出そうとしすぎて小銭ぶちまけた。ぶちまけ方がえぐすぎて、降車するみなさんの歩みを止めてしまった。死。

桐生や周りの人が拾うの手伝ってくれたけど、もう恥ずかしくて死にそうだった。慌てずに最後に降りればよかった。【×】

4：朝十時五十分、ついにスイパに降り立つ。事前にホームページを穴が開く位見ておいて、華麗に桐生をエスコートする。

→気を取り直して華麗にエスコートするはずが、その敷地のあまりのドデカさに度肝を抜かれる。どうなってんだこの遊園地。面積の暴力だろ。

それでもめげずに最初に選んだアトラクションは、遊園地エリアの半分位を上から見渡せるモノレール。最初はこれがいいだろうと思ってたら、桐生も同じ意見で嬉しかった。

天気もいいし景色もきれいだし最高だ。ていうか何より、はしゃいでる桐生がかわいい。ところで『遊園地　最初に乗る』で検索すると、なぜか心理テストがドバドバ出てきて目的を果たすのが大変だぞ。【◎】

5：次はお化け屋敷。ここでビビらずかっこいい所を見せるために、すぅにホラー映画もあほほど見せられたぞ。どこからでもかかってこい。

↓トロッコに乗って屋敷内を回るタイプのお化け屋敷だったんだけど、前の人との距離がまぁまぁ近くて『叫び声が聞こえて次の展開がわかる』っていう超絶ネタバレお化け屋敷だった。

当然わたしの『お化けにびっくりした桐生が、どさくさに紛れて、だ、抱きついてくれたりしないかな……』なんて期待は期待に終わり、桐生は終始ずっとゲラゲラ笑ってた。うん。桐生のキャラは、こっちだよな……。

ところで桐生って、本人は『え～っ❤　そんな事ありませんよ～❤』って言うけど、言うまでもなくSだよな。奇襲系お化けに怯えて涙目になったわたしを見る目がきらきらしてた。わたしは見逃さないぞ。【◎】

6：体を冷やさないように、いったん室内ゲームコーナーに退避。射撃ゲームで、FPSで鍛えた腕を披露し、パーフェクトを出す。そして景品をさりげなくプレゼントすると共に『先輩かっこいい❤』とか言ってもらう。

↓パーフェクトどころか『お祭りにありがちな、やたら足の短い指人形』を一個とるのが精いっぱいだった。やっちまった。

おまけに桐生はゲームをしなかった。『私は先輩がやってるとこ見てます❤』って笑って

たけど、本当はこういうゲームには興味がなかったか、あるいはあんまりお金を使いたくなかったのかもしれないな。

桐生は倹約家だってことを軽く見てた。あんまりよくなかったかも……。でも指人形は受け取ってくれた。『こんなのいらないですよw』って草生やされるんじゃないかと思ったけど、なんかすごい嬉しそうにしてくれて……可愛かった。【△】

7：ＵＦＯキャッチャーで、スイパ公式キャラのストラップを一組ゲットする。そして片方をプレゼントし『よかったら、一緒につけないか？』と誘う。これまで弟と妹のため、そして己のオタ活の為に磨いたテクニックの見せ所だ。

↓これは中止。お揃いのグッズは欲しかったけど、桐生に無駄にお金を使わせちゃダメだ。仮に自分でお金を出すにしても、この流れでＵＦＯキャッチャーも失敗したら大事故だよ。【一】

8：十二時半、お昼ご飯を食べる。スイパのホームページは飲食店の情報が適当だ。もしかすると、ちょっとお店選びに難航するかもしれない……。

↓と思ってたら、桐生がお弁当を作ってきてくれてた！　嬉しすぎる。

最高においしかったし、しかもわたしの好きなおかずばっかり。

『なんでわかったんだ？』って聞いたら『愛の力です❤』って言われたけど、それって

つまり、わたしの事を普段からよく見てくれてるって事だよな。ていうか、先週ちょくちょくうちのクラスまで来てわたしのお弁当見てたのは、このためだったのか！　好き。
しかし、肝心のわたしは、桐生に席取りしてもらってジュースを代わりに買いに行く位しかできなかったので、自己評価は【〇】。

９：十三時十五分、お腹を休めるのも兼ねてミニサーカスを見に行く。
→サーカスすごかった。フリーパスで入れる、追加料金なしのショーっていうから簡単なやつだろうと思ってたら、すっごかった！
思わずデートなのを忘れるほど見入ってしまった。『ダメだろデートなの忘れてちゃ』って自分でも思うしそれは大反省なんだけど、でも、本当にすごかったんだ。桐生も楽しんでくれたと思う！
ところで終わった後『桐生にどれが一番すごいって思った？』って聞いたら『先輩の顔❤』だってさ。そ、そんなにすごい顔して見てたかなぁ……？【〇】

１０：十三時五十分、そろそろ活動しても大丈夫だろう。ゴーカートに乗る。結構力の入ったサーキットらしいから楽しみ。
→桐生に運転を任せたんだけど、ドライビングテクニックがすごい。
しかもかなりのスピード狂。一緒にギャーギャー言いながら乗ってたら、あっという間

にゴールについちゃったよ。
せっかくだから、すぐにもう一回並び直して計二回乗った。こんなに桐生が気に入ってくれたんだしな。
ちなみに桐生が選んだのは、一回目は真っ赤なスポーツカー風のデザインの奴で、二回目は黄色い可愛い奴。なるべく『いかにもゴーカート！』って感じの、ベタなデザインのに乗りたかったんだって。桐生は意外と車好き。覚えておこう。
ほんと、桐生が楽しんでくれて良かった。若干酔いながらリピートした甲斐があった。【◎】

１１：十四時三十分。遊園地の定番、ジェットコースターに乗る。大事を取って、二種類あるジェットコースターのうち『比較的ゆるい』と言われている方に乗る。
↓おい、比較的ゆるいって言ったのどこのどいつだ。
アップダウンやばくて、気絶するかと思ったよ……。
顔色一つ変えずに楽しんでたの、桐生と先頭に乗ってたちびっ子だけだったぞ。
つまり桐生七緒ってやつは乗り物系、それもスピードが出るのが好きなんだな。そうかそうか。次があるなら、乗り物系に強いテーマパークに連れて行ってあげよう。
だけど、その機会があったとして、その時わたしは生きて帰れるだろうか。さっきのゴーカートと今のジェットコースターだけで、だいぶくたばりそうなのに……。ウッ。【◎】

――かくして、主人公は酔った。
ジェットコースターから降りるなりフラフラとベンチに向かい、そのまま動けなくなった。
そして七緒に、お水を買ってきてもらったという訳である。
実を言うと、こうなる予兆はあった。
何せ主人公は、涼羽に心配されるほど酔いやすい上に、昨日はほとんど寝てない。
今日という日を絶対に成功させ、七緒ともっと深い関係になるのだ！　と意気込むあまり、またもイメトレを始めてしまい、気づいた時には朝だったのだ。
当然、七緒の夢を見る事は叶わず、この話題を振るタイミングも逸してしまっている。
だけど、七緒からも話してこないという事は、七緒の夢にも主人公は出てこなかったのだろう。勝負は主人公の不戦敗、あるいは二人とも未登場という事でノーコンテストになりそうだ。
それは少し残念でもあるが……夢なんて狙ってみられるものではないし、自然な結果だろう。と、主人公は思う事にした。

「【主人公を優しく気遣う。
しかし内心では『これって、さっきゴーカートに二連続で乗ったのもあるかも。そうだ

としたら申し訳ない……』と不安になっている】
ジェットコースター、ちょっと激しかったですもんね。
【『ひとまず移動しよう。このままここに居て、身体を冷やすのはいけない』と考える。
今日は比較的暖かいとはいえ、寒い地域の十月は、長時間外にいない方がいいので】
そこのご飯屋さんで休みましょうか。
それとも、そろそろ……」

〈主人公〉
「だ、だめだ……」

主人公、震える手でペットボトルを握りしめ、声を振り絞る。
その声はしゃがれ声で、もはや、何と言っているのかさえ不明瞭だ。
それでもここで『そうだな、帰ろうか』などと言うつもりはなかった。
主人公がこのスイパで絶対にやらねばならぬ事は、十二番目のアトラクションだからだ。
そう。具体的には

１２：十五時ごろ、疲れてくる前に小休止。『休憩がてら、観覧車でも乗らないか？』とスマートに桐生を誘い、二人っきりになる。そして観覧車の中で今日の出来事を一緒に振り

返って……観覧車が頂上に来たところで、告白する！
↓【？】
である！

〈主人公〉
「ま、まだやっていない事があるぞ。
それをやるまでは……わたしたちは……スイパを制したとは言えないんだ……」

ゆえに主人公は、気力を振り絞る。
心の中のもう一人の自分が『ここは素直に桐生の言う事を聞いて、一旦お店で休憩してから、観覧車に乗ればいいんじゃねぇかなぁ？』と助言してくれているが、それをお断りして七緒に訴える。

「【心配そうな声できょとんとして。
『まだやっていない事』の見当がつかないので。
『そんな身体でなお、どうしてもやりたい事があるの？』と思っている】
え？　『まだやってない事』って、何（なん）ですか？」

〈主人公〉
「そ、それは……それはだな……」

しかし、ここで主人公はしくじった。
無駄に大仰な言い方をしてしまったせいで、急に恥ずかしくなってしまったのだ。
これでは全く『スマートに誘っている』とは言えないし、それどころか『今から観覧車で告白します』と、ネタバレしてしまっているようなものではないか。

〈主人公〉
「あ、あ、ぁの……その……」

ど、どうしよう。やらかした。
恥ずかしくなっちゃって、言葉が出てこない。
どうしよう……どうしよう……。

と、主人公がアワアワしていると。

▲　ボイス加工あり
【少し遠くで聞こえる】
【だんだん近づいてくる】
〈理沙〉
「【甘えた様子で】
えー。いーじゃん。手ぇ繋ごうよぉ」

▲　ボイス加工あり
【少し遠くで聞こえる】
【だんだん近づいてくる】
〈中性的な客〉
「【照れた様子で。『つか』は『というか』という意味】
恥ずかしいって。つか、くっつきすぎ」

二人の前を、一組のカップルとおぼしき人達が通りかかった。
その二人は、小柄な女性客の方が積極的にアプローチしているようだ。
だが、もう一人の、男性……？　女性……？　判別しづらいので中性的な客と表現しよう……は、なんだか照れている様子だ。

しかし、主人公にはわかる。
あれは、絶対に手を繋ぎたい。あるいは少なくとも『手を繋ぐのはやぶさかではない』と思っている人間の動きである。と。
だって、本当にそのつもりがないなら、ポケットに手をしまったり、小柄な女性客と距離をとったりしてもいいはずだ。しかし、中性的な客は離れる事は決してせず、手は両手とも百パーセント外に出してぶんぶん振っている。
それゆえに全体的に落ち着きがないし、おまけに指先なんて、主人公の居る位置から見てもピッカピカだ。
あれは間違いなく、デートに備え、前日から念入りにメンテナンスした人間の手である。
だから主人公は思う。

わかる……わかるぜ……。
なぜならわたしも塗りまくったもんね。ありとあらゆる手に良さそうなものを。
気になってる子とデートに来たのに、運良く手を繋げた途端『うわっ。この人、手ぇガッサガサ』なんて思われたら大変だもんな。
わかる。わかるぞぉ、君ぃ。

と。

▲　ボイス加工あり
【だんだん遠ざかっていく】
〈理沙〉
「【少し悲しそうに】
やなの？」

このように主人公が後方理解者面していると、ここで動きがあった。
中性的な客が勇気を出したのだ。

▲　ボイス加工あり
【だんだん遠ざかっていく】
〈中性的な客〉
「【ぶっきらぼうだが、はっきりと言う。
『手を繋ぐのが嫌なわけではない。誤解されては困る』と思っている】
やでは、ない。
【少し間をあけてから。意を決して、自分から女性客と手を繋ぐ】
よし、いくぞ」

▲　ボイス加工あり
【だんだん遠ざかっていく】
『えー、ありがとう！』と言っている途中で聞こえなくなる】
〈理沙〉
「【驚いて。中性的な客に、ふいに手を握られたので】
あっ……。嬉しい！　えー、ありがとう！」

こうして二人は去っていき、ジェットコースター前エリアには主人公と七緒が残された。
また、主人公だけでなく、七緒もついつい二人に見入っていたようだ。
なんだか、お互いもじもじしてしまう。

「【少し恥ずかしそうに。『あっ、しまった』という感じで。
先ほどの二人の会話に思わず聞き入ってしまい、話が途中になっていた事に気づいたので。しかし、内心では『あの女の子、手を繋いでもらっていいなぁ……。私も先輩と手を繋ぎたい。だけどこんなに人目のある場所だから、先輩は困っちゃうかもしれない。でも私からお願いしたら、先輩は優しいから断れなくて『いいよ』って言う気がする。だから、私からは言い出せない』と思っている】

……あ、すいません。で、やってない事って……」

だがここで、主人公は思う。

――二週間前のわたしだったら、こんな雰囲気の時『ここで桐生に、しれっと手を握られたり、腕を組まれたりしちゃう』とか『何もしなくても、桐生がリードしてくれる』『わたしはそれに、流されてるだけでＯＫ』とか、そういう展開を期待するんだろうな。

わたしの中で桐生は何でもできるスーパーキャラで。フィクションの世界の女の子みたいに自信満々で積極的で。とにかく自分とは釣り合わない、別世界の存在だと思ってたから。

でも、今はそうじゃない。

今のわたしは、桐生が本人が言った通り意外と恥ずかしがり屋で、積極的は積極的なんだけど、妙な所で一歩引いちゃう事を、もうわかってきてるんだ。

よく考えたら、知り合った時から桐生はそうだった。

やたら近寄ってくるくせに、すぐ耳元でしゃべってびっくりさせるくせに。

よくわかんないとこで立ち止まって、距離感を気にしてるように見えるんだ。

たとえば――……『近づく』のはよくても『触る』のはダメだって思ってるみたいな。

そんな感じの謎ルールが桐生の中にはあって……それは多分、こっちから動かない限り、

ずっとそのままな気がするんだ。
だから、わたしから変えるんだ。近いようで近くない今の関係を、ぐいっと引き寄せるんだ。

と。

〈主人公〉
「……桐生と、手を繋ぐ事」

【聞き返している。そのような答えが返ってくるとは思っていなかったので】
えっ？」

〈主人公〉
「それから。観覧車に乗る。事っ！」

早口で言い終えると、七緒が驚いたように目を見開く。
その顔ははっとするほど綺麗で、主人公は

……つくづく可愛い子だなぁ。
もし桐生をイラストで再現するとなったら、わたしの画力じゃ、ちょっと色々心配だよ。

と思う。
そんな素敵な女の子が、今自分だけを見ている。
主人公は今まで、これを現実だと受け入れられなかった。
『この人は自分に好意を抱いてくれている』と受けとめて。
嬉しく思う自分の心を見せて、知ってもらって。
そうまでしたのに、何かの拍子でがっかりされて……失うのが怖かったのだ。
今もそれは変わらないし、逃げ出したくなる事もある。
でも、仮にそんな、こんなに弱くてダメな自分が好かれるなんていう、とんでもない奇跡がこの身に起きているのなら。
照れているなんてもったいないと思ったし――……さっきの中性的な客のように、さっさと勇気を出すべきだ。と、思ったのだ。

「【ドキドキと声を震わせて。明らかに期待している声で。
確認するように、少しゆっくりめに。
しかし、期待と喜びを隠しきれない】

いいん、ですか？」

〈主人公〉
「もちろん、どっちも、桐生が嫌じゃなければだけど……」

「【嬉しくて声が震え、少し早口になる。
とても嬉しい。『この機会を、絶対に逃がせない』と思っている】
嫌じゃないです。手。繋ぎたいです。
観覧車にも乗りたいです……！
【少し間をあけてから。
照れつつも嬉しそうに。
いつもの七緒なら。ここで『食いつきすぎてしまった』と反省し、照れ隠しに主人公をからかってしまうところだ。
しかし今は『主人公がストレートに気持ちを伝えてくれたのだから、自分もそうしよう』と思っている】
へへ。どうしたんですか今日、先輩。
めっちゃ嬉しいです……❤」

〈主人公〉
「だって、デートなんだろ？　それっぽい事、するべきかなーって、思ってさ」
もごもごと主人公が返事すると、七緒が目を潤ませる。
だけど主人公は
あー。もっと正直に『桐生と手を繋ぎたいと思ったから』って言えばよかった。
でもこれが、今のわたしの限界なんだよなぁ……！
などと反省モードでいたから、気づかなかった。
「【照れっつも嬉しそうに。
正直な所『主人公は自分が、先ほどのカップルを凝視するのを目の当たりにした。だから、自分に気を遣って『同じように手を繋ごう』と提案してくれたのではないか』という疑念がある。だが、それでもこの機会を逃したくないと思っている】
……そっか❤
【照れっつも嬉しそうに、主人公の言葉を復唱する。
余計な事をして、主人公と手を繋ぐ機会を逃したくないので】

そうですよね。デートですもんね❤」

もしこの時、七緒が泣きそうなほど喜んでいるのに気づいて、主人公が強引に手を握って。

ロケーションなんて気にせず『好きだ』と言ってしまっていたら、二人はどうなっていたのだろう。

〈主人公〉
「そうだぜ！」

もしかしたら、ここからの時間は、まるで違う展開になっていたのかもしれない。

SE3　主人公が立ち上がる音
【最初から最後まで流す】

だが、一度選んだ選択肢はもう取り消せない。
ゲームと違ってフラグ管理なんてできないし、攻略サイトもフローチャートもない。
その時選べる、ベストの道を探るしかないのだ。

だから主人公は立ち上がって、七緒に右手を差し出す。
その手が握られた時……ちょうど、一番綺麗な赤色をしたゴンドラが降りてきた。

「【とても嬉しそうに。
疑念を振り払うためにも、明るく振る舞う】
じゃあ、行きましょう？　先輩❤」

▲1　ここでSE1がフェードアウトする。

一度フェードアウトする。

SE4　【ゴンドラ】観覧車の環境音
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【SE5と重ねて一緒に流す】
【▲2　まで流し続ける】

SE5　【BGM】観覧車の環境音2

【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【ＳＥ４と重ねて一緒に流す】
【▲２　まで流し続ける】

約十分後。
主人公と七緒、観覧車のゴンドラに乗っている。

「【嬉しそうに、きゃっきゃとはしゃぐ。
明るく振る舞う事で、先ほど感じた疑念や、この後待ち受けている母親の手術など、不安な事を忘れようとしている】
わぁ……！　見て見て先輩。
ここからゴーカートのサーキット、全部見えますよ❤」

〈主人公〉
「お？　マジか。見せて見せて？」

「【サーキット内にある、先ほど自分達が乗ったカートを指さして。

それは今別の客が運転しており、走っている様子が見える】
ほら。あれがさっき乗ったカートです。
【実感を込めて、とても楽しげに、うっとりと。
七緒は今日体験したアトラクションの中でも、特にゴーカートが気に入ったので】
面白かったですよねぇ。私もう、ずっと運転してたかったです」

七緒はこの観覧車が気に入ったようで、先ほどからはしゃいでいる。
だから主人公はホッと胸を撫でおろしつつ、ドキドキと告白のタイミングを伺っていた。
乗車してから、すでに五分が経過した。
一周の所要時間は約十五分。つまり、そろそろ切り出さないと、頂上で伝える計画には間に合わなくなってしまう。
だが、七緒は本当に楽しそうで、なんだかそれは憚られた。
いつまでもこのままでいたい。
このままでは機会を失うとわかっていても、楽しそうな七緒を見ていたい。
たとえそれを『勇気を出せない言い訳だ』と言われても、主人公はなかなか動けずにいた。

〈主人公〉

「桐生、めっちゃはまってたもんな。ゴーカート」

「【きゃっきゃと楽しげに。
楽しかった事を思い出すとテンションが上がり、不安が薄れてきたので。
実際『自分はどうやら車の運転が好きらしい』と自覚するほど楽しかったので。
それを少々誇張して表現すると『将来レーサーになりたい』になる】
はい！　もう将来、レーサーになりたいです❤
【しかし『もう満足した』という事を伝えておく。
本当は、もう一回乗りたい位気に入っている。
しかし、それをアピールしたら、優しい主人公は体調不良を押してでも『じゃあ、もう一回乗りに行くか？』と言いかねないので。
その結果『十年位遊んだ』という、ややオーバーな表現になる】
でも、だいぶ満足したかな……。
今日だけで、十年位遊んだ気分です❤」

〈主人公〉
「ははっ。十年は多いだろ～」

「【きゃっきゃと楽しげに。『本当に楽しかった』という気持ちを伝えると共に、主人公に『これ以上無理しないで。私はもうこんなに満足したから、私に気を遣わず、きりのいい所で帰りましょう』と言いたい】
え～？　その位楽しかったんですよぉ。
【幸せそうに。これまで体験したアトラクションを振り返る】
だって、全部最高でしたもん。
サーカスはすごかったし、先輩の射的の腕も見れたし。
【どれも本当に楽しかったが、主人公と一緒だと、より一層よい思い出になったと感じる。しかし、それを素直に言えず『からかいモード』になってしまう】
お化け屋敷なんか、先輩涙目になってて可愛かった～❤」

〈主人公〉
「も、もう！　桐生ってば、またそうやって意地悪言う！
お化け屋敷怖かっただろ！　ヘラヘラしてたのなんか、桐生位だったんだからな！」

「【満足げに、ちょっと意地悪に笑って】
ふふふふ❤」

〈主人公〉
「もう。ばーかっ。桐生のばーかっ」

【上機嫌で笑って。主人公のリアクションが非常に可愛らしく、自分好みなので】
あははっ❤」

だけど、七緒の一挙一動に、主人公の心は揺さぶられる。
この子の事が好きだ。
一人の女の子として好きで、恋人になってもっと深い関係になりたいと思う。
その上、今は七緒の笑い声さえいつもと違って聞こえ、主人公はだんだん頭がぐるぐるしてくる。
これは、観覧車という場所の非日常性からくるものだろうか。
それともまだ乗り物酔いしているのだろうか。
とにかく、このままでは、訳のわからないタイミングで告白してしまいそうだ。
しかし、主人公はこうも思う。

で、で、で、でもこれって。なかなかいい雰囲気じゃないかな……。
いけるんじゃ、ないのかな。

いや、たった今『ばか』とか言っちゃったけど。確かに桐生はばかなんだけど。
でも、ホント今日、ずっと楽しそうにしてくれるし……。
何しても喜んでくれるし……いやずいぶんとからかってくれるけど……。
とにかくいい雰囲気だと、思う！
気分はまだかなり悪いけど、我慢できないほどじゃないし。
……よし、適宜タイミングを見つけて、言うぞ！

と。
こうして主人公は、ついに決意を固めた。
頂上までもうすぐ。だから、用意していた最初のセリフを言おうと、口を開きかけた。

「【できるだけ普段通りの口調で切り出す。
母親の手術の件について伝えたい。
『ねぇ、先輩。今まで言えなくてごめんなさい。実はうちのお母さん、検査入院して生活改善しても、数値がよくならなくて。ずっと入院してるんです。
それで、月曜日に手術する事になって。
私、付き添いがあるので午前中お休みするんですけど、もし良かったら、朝、少しだけ会えませんか』と言いたい】

※後ろにある『様子が明らかにおかしい』という描写は無視して演じて下さい。聞き手にはトラック０６での様子から『何か言いたい事があるらしい』というのは伝わっているので、普段通りに近い演技でＯＫです。

ねぇ、先輩」

〈主人公〉
「ん？」

だけど、先に話し出したのは七緒だった。

〈主人公〉
「どうしたんだ？」

だから主人公は拍子抜けし、だけど次の瞬間、それ以上に心配な気持ちが沸いて聞き返す。

七緒の様子が何だかおかしい。
本人は普段通りに振る舞っているつもりなのだろうが、明らかにおかしい。
鈍感な主人公でもそう感じ取れる位、ただならぬ様子の七緒が居たからだ。

「【できるだけ普段通りの口調で切り出そうとする。
しかし、話し始めたタイミングで、主人公が腕をぶつけてしまう】
あのね。私……」

〈主人公〉
「あいたっ！」

しかし、心配になった主人公が身を乗り出し、向かいの七緒に近づこうとした瞬間、事故は起きた。
背もたれの部分に、ゴチン！　と肘をぶつけてしまったのだ。

ＳＥ６　主人公が観覧車内で腕をぶつける音
【最初から最後まで流す】

「【少し驚いた後、優しく。
意地悪な要素はなく、ただただ主人公を心配している】
あっ！　大丈夫ですか？」

〈主人公〉
「あっあっあっ……」

その途端、主人公の腕はしびしびと痛む。いわゆるファニーボーンに直撃したのだ。
主人公は声も出せなくなり、ただただ肘を押さえて悶絶する。

「【心配そうに、優しく確認する。
意地悪な要素はなく、ただただ主人公を心配している】
肘？　肘ぶつけちゃいました？」

〈主人公〉
「お、おう……。でも大丈夫……大丈夫だ。……この通り動くぜ……」

「【優しく笑って。『硬い素材の背もたれに、肘をぶつけてしまったのか』と理解して。
意地悪な要素はなく、ただただ主人公を心配している】
あー。そこの背もたれ、ちょっと危ないですもんね……」

〈主人公〉
「ふぇぇ。でもやっぱ痛いいいい……」

「【優しく笑って。
一度は平気そうにした主人公が素直に『痛い』と打ち明けたので。
主人公が可愛らしくて、思わず笑顔になってしまう】
あはは。
【子どもをあやすように優しく。
まるで、トラック01で颯太と接していた時のような雰囲気になる】
よしよし。痛いの痛いのとんでけ〜❤」

〈主人公〉
「……ありがと……」

うう。マジで痛ってぇ……。
お化け屋敷に続いて、また涙目になっちゃったよ。これをネタにまた遊ばれそう。
でも今はそれどころじゃなかった。桐生が一大事っぽいのに、他の話なんてしてられないよ。

主人公、ぶつけてない方の腕で涙をぬぐうと、慌てて身を乗り出して尋ねる。

〈主人公〉
「で、なんだ？　今、何か言いかけてたよな？」

【『私、何か言いかけてた事なんてありました？』『あ、今思い出しました』という感じで。
実際はもちろん忘れてなどいない。
本当は、即座に心配してくれる主人公を見て、胸が一杯。
今すぐ主人公に抱きついて甘えたい気持ちと『やっぱり、こんな優しい人に寄りかかってはいけない。この人はたとえ恋愛感情がなくても、どんなに無理をしてでも助けてくれる気がする』という気持ちがせめぎ合う】

ん？
あ。はい。話途中でしたね」

〈主人公〉
「うん。そうだよ。何かあったんだろ？」

だが、続きを促すと、七緒はなぜか首を傾げ『へへっ』と笑う。
まるで、先ほどの自分の行動を打ち消すような事を言い出す。

「【笑ってごまかし、しれっと忘れたふりをする。
『やはり話せない。先輩は恋人でもない、ただの友達なのに、甘える事はできない』と判断したので。『大した話じゃなかったので、驚いた拍子に忘れちゃいました』とでも言うような態度を取る】
あれ。何言おうとしてたか忘れちゃいました。
思い出したら言いますね❤」

〈主人公〉
「え……？　忘れちゃったのか？」

だから主人公は、困惑しつつも『ほんとか？　本当は、何かあったんじゃないのか？』と聞こうとした。
だけど七緒は、それを許さない。
いつもの得意技で主人公の気をそらし、自分のペースに持ち込もうとする。

「【しれっと話題を変える。これ以上この話題を続けたくないので】
あ❤　頂上」

〈主人公〉
「えっ！」

「【外の景色を指さして。
こうする事で、主人公の意識を先ほどの話題からそらそうとしている】
ほら。ちょうどその位ですよ。
【少し間をあけてから。
うっとりと、幸せそうにため息をつく。
こうして七緒は『母親の手術の件については、話さない。これまで通り、一人で乗り越える』決意をする。
また、これによって現実逃避を始める。
ここから、実際には到底不可能な事を言い出すようになっていく】
はー。綺麗……。
帰りたくないなぁ。
もう、ずっとここに居たいです」

〈主人公〉
「観覧車にぃ？　なんだよ、そんなに気に入ってくれたのか？」

……もしこの時、主人公が告白よりも、七緒の本心を聞き出す事を優先していたら。

「【上機嫌で。とても楽しそうに。
到底不可能な事を、まるで実際にできる事かのように言う。
また、きゃっきゃと主人公に同意を求める】
はい、このまま。今日は観覧車に泊まるんです❤
先輩もそうしましょ？」

〈主人公〉
「いやいやいや、せめて近くのホテルとかだろ」

――え？　やっぱりおかしいよ。
桐生ってすげぇ現実的で、めっちゃ地に足がついてて。
いつも具体的で、フワっとした話とか全然しないじゃん。

絶対に何かを隠してる。

『これに気づいた以上は』と、すぐに行動していれば。

「【上機嫌で。とても楽しそうに、そうしたい根拠を述べる】
だって、景色綺麗だし。先輩と一緒だし。
最高じゃないですか。
先輩もそう思いません？」

〈主人公〉
「……まぁ、な？
わたしも、今日はほんとに楽しかったし。
帰らないでまだまだ遊んでられたらとか、明日もここに居られたら、いいなー。
とは、思うけど」

「【食い気味に上機嫌で。とても楽しそうに。
主人公が同意してくれたので。
まるで、自分達が望めば、本当にそれが実現するかのような雰囲気で話す】

ね？」

……そうだよ。今からでも間に合う。
今すぐもう一回『本当は何かあったんだろ？』って聞いてみよう。
今のわたしには、告白する事よりも、人としてもっとやるべき事があるだろ。

と、今楽しく会話する事よりも、これからの自分達の事を優先していれば。

〈主人公〉
「はは。そんなに喜んでくれるなら、ほんと誘ってよかったよ。
そういう桐生を見たらさ。きっと田中さんも」

多分主人公は間違えずに済んだ。
七緒の挙動に疑問を抱いたまま話を合わせて、あげく、口を滑らせるなんてミスは、まずしなかっただろう。

「【優しく穏やかに。でも『えっ……？　どうして田中さんの名前が出てくるの……？』という感じで聞き返す。

七緒はこの一言だけで、おおよその事を察してしまったので】
ん？
【少し間をあけてから】
田中さん？」

……あ。
やば……。

瞬間、空気が凍り付く。
ありえない事を、ありえるかのように話していた七緒の笑顔が、張り付いたように固まる。

「【少し困惑しつつも、落ち着いて尋ねる。
だがすでに『そうか。この前の金曜日、田中さんが妙に先輩と連絡先を交換したがっていたのはこういう事か。つまり、都合よく無料チケットやバス券があったのも、田中さんの協力によるものだったのか』と察している。
しかしまだ確定ではないので、優しい口調である】
えっと。何（なん）で今、田中さんの話になるんですか？」

もし、ここから最大限誠実な対応を取るとしたら。
『即座にすべてを打ち明けて謝る』『その上で、自分の気持ちをはっきり伝える』ほかなかっただろう。
だけど、今の主人公の頭は真っ白だ。
由紀乃との約束を守る。その為につき続けてきた嘘を自分から壊してしまったショックで、考えが働かなくなってしまったのだ。

〈主人公〉
「えっ。あっ。その……。
『田中さんも『シフト作り頑張った甲斐ある』って言ってくれるだろうなぁ』って……」

だから主人公は失敗を重ねる。
すでに誤魔化す事など不可能なのに、この期に及んで逃げ出そうとしてしまう。

「【落ち着いて尋ねつつ、疑いが確信に変わる。
『ああ、やっぱり自分の思った通りなんだ』と確信している。
それでも七緒はここで『そうですね。私もそう思います❤』と言って話を合わせれば険

悪な雰囲気にはならず、この話題も終わる事を理解している。
そうすればこの空気は改善され、今にも泣き出しそうにしている主人公も、ホッとするだろうとわかっている。
でも、できない。らしくもなく追及してしまう。
『今の自分は、手術の件もあって気が立っている。普段ならうまくやり過ごせる事にも深く傷ついて、正常な対応ができなくなっている』と、そこまで自覚していて尚、らしくもない態度を取る】
私。田中さんが店のシフト作ってるって話。
した事ありましたっけ……」

〈主人公〉
「……」

それが、修復を決定的に不可能なものにしていく。
主人公は初めて聞く七緒の声音に怯え、まともに話せもしない。
それがさらに七緒を傷つけ、沈黙する間にも、観覧車は地上に近づいて行く。

「【息づかいだけで表現する。

大きく息を吸った後、吐く。自分の気持ちを何とか落ち着かせようとしている。
だけどそれを主人公は『怒っている』『呆れている』と受け止める】
……。
【つとめて明るく。何とか『普段通り』の声を出そうとする。
主人公を責めているように聞こえないように、必死で努力している】
あー……わかった❤
先輩がおっしゃってた、交通系の仕事してる親戚って。
ほんとは田中さんの事だったんですね？
【できるだけ嫌味に聞こえないように、さらっと言う。
実は、最初に話を聞いた時から『なんだか違和感のある話だ。自分の知り合いに二人も『身内に交通系の会社に勤める家族がいる』なんて事があるものだろうか』と思っていたので】
何（なん）か変だと思ったんですよ」
〈主人公〉
「それは……」
「【ちょっとからかうような口調になる。普段の口調に戻って。

務めて明るく、普段の口調を作って、しかし真相を暴く】
わかりました♪
先輩、田中さんから『券あげるから、なーちゃん遊びに連れてってやって』とか言われたんでしょう。
【少し間をあけてから。普段の口調で話そうとしている。
だが、どこか暗く、ショックをこらえるような声音になってしまう。
主人公に口をはさむ隙も与えずに話しているのに『どうして何も言ってくれないの。どんな無理のある言い訳でもいいからしてほしいのに、してくれないの』と深く傷ついている】
そっか。だから今日誘ってくれたんだ。
田中さん、いつも私の事心配してくれるからなぁ。
ほんと。感謝しなきゃですね」

〈主人公〉
「あの、桐生……」

主人公、途端に饒舌になる七緒にたじろぎ、まともに呼吸する事さえできなくなってつむく。

違う。違うんだよ桐生。
そうじゃないんだ。
確かにスイパに行こうと思ったきっかけは、田中さんからのお願いだったけど。
わたしは自分の意思で桐生と遊びに行きたいって思ったから、引き受けたんだ。
ちっとも遊びに行ってないっぽい桐生が心配だから、どこかへ連れて行きたいって。それがいかにもデートって感じのものになったら最高だって思ったから、誘ったんだ。
今も……桐生の事が大好きで、桐生と一緒に楽しく過ごしたいって思ってるから、ここに居るんだ。

そう言えば誤解を解けるはずなのに、たったこれだけの言葉が、どうしても出てこない。

「【しれっと話題を変える。これ以上この話題を続けたくないので。
弁解一つしない主人公の態度に傷つき『ああ、やっぱり先輩はわたしの事が好きだから一緒に居てくれた訳じゃなかったんだ。ただずっと『自分の事を好きだと言っている、なんだか可哀想な境遇の女の子』に同情して、親切にしていただけなんだ』『なのに浮かれて、期待して。頼ろうとした自分が馬鹿みたいで、とてもみじめだ』と思う】
あ。もう地上に着いちゃう。

終わるの早ーい❤」

こうして観覧車は頂上から地上にたどりつく。
二人だけの幸せな時間はすでに終わり、重苦しい空気だけが残される。

「【少し間をあけてから。
少し切なげに。まるで主人公と出かけるのは、これが最後かのように】
楽しかったなぁ。
【少し切なげにつぶやく。
『観覧車に泊まりたい』と言い出すほど、ずっと主人公と一緒にいたいと願う気持ちは、本心だったので】
……本当に泊まれたらよかったのにな」

一度フェードアウトする。

SE7　遊園地の環境音2
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】

【トラック終了まで流し続ける】

約数分後。

主人公と七緒、観覧車から降車し、地上に戻ってきた。

ＳＥ８　二人の足音

【最初から最後まで流す】

※ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

【ＳＥ５を３秒ほど流して『遊園地スタッフ』のセリフ。かぶせて流す】

〈遊園地スタッフ〉

「【アルバイトの女子大学生。

仕事慣れしており、乗客である主人公達に、丁寧にお礼を言う】

ご乗車ありがとうございましたー」

すると、先ほど座ったベンチが見える。

それはほんの二十分ほど前、二人がとても幸せな気持ちで過ごした場所だ。
でも今の二人には、ろくな会話もない。
主人公の顔も見ずに歩く七緒と、泣きそうな顔でついていく主人公がいるだけだ。

「【まるで普段の口調で。
観覧車での出来事など、なかったかのように】
はー。綺麗でしたねぇ。
こんないいお天気の日に来れるなんて、もうなさそう。
【晴れ晴れとした様子で。
主人公が何か言いたげな事には気づいているが『話を聞いてあげよう』という態度はとらずにいる。
先ほどの件で非常に傷ついており、いつもの七緒でいられなくなっているので。
煮え切らない主人公に内心腹を立てており、『話したい事があるようだけど、はっきりと声をかけてくれない限りは、応じない』と思っている】
一生の思い出って感じです❤」

〈主人公〉
「あの、桐生……」

「【しれっと話題を変える。
わざとらしくスマホを見ながら言っている。
主人公に冷たくしたい。自分のそっけない態度で傷つく主人公を見て、暗い喜びを感じ、嗜虐心を満たしていたい。そうでもしないと、あまりに惨めなので】
あ。時間やばくないですか？　そろそろ帰らないとですね」

SE9　七緒の足音
【最初から最後まで流す】

〈主人公〉
「桐生……！」

必死の思いで呼び止めると、ようやく七緒が振り向く。
出会った日からずっと自分の事を好きだと言ってくれて、いつでも好意的に接してくれる女の子。
主人公にとって桐生七緒とはそういう存在で、自分が努力さえ怠らず、不快にさせず。
その想いに応えられる人間であれば、それは変わらない。ずっとそう思っていた。

だけど今の彼女は違う。
こちらを見て笑っているが、いつものように『先輩』と呼び掛けてくれはしないし、にやにやしながら近づいてきて、思わせぶりな事をささやきもしない。
これまで主人公が当たり前のように享受してきたものを、決して与えてくれはしないのだ。
こうなって、ようやく主人公は気づく。
――ああ、わたしは努力を怠ったんだ。
せめて桐生に嫌われない人間であろうとしたのに、一番桐生が嫌がる事をしちゃったんだ。
と。
「【穏やかに続きを促す】
んー？」
〈主人公〉
「ごめん。その。本当にごめん……」

しかし、こうなってから謝罪しても、すでに遅い。
主人公の真意は伝わらず、疲れた七緒は勘繰り、どこまでも曲解する。
二人の距離は、ますます広がって行く。

「【まるで普段の口調で。
観覧車での出来事など、なかったかのように。
また事実『謝る事はない。先輩も由紀乃も、何も悪くない』『悪いのは、勝手に期待して勝手に傷ついたあげく、不機嫌な態度を取っている自分だ』『というか、謝るという事は、やはり先輩は来たくてここに来た訳ではないのだ』と思っているので】
あは。何（なん）で謝るんですか？
先輩は何（なん）にも悪くないです。
そもそもお二人のお陰で、私はここに来られたんですから」

〈主人公〉
「……」

二人の間に沈黙が流れる。

それは七緒が与えた最後の猶予だったが、主人公は気づけなかった。

「【またも、しれっと話題を変える。
まるで普段の口調で、何でもない事を話すかのように切り出す】
そうだ先輩。さっき言おうとした事の続き。
思い出したんで言ってもいいですか？」

〈主人公〉
「え？」

だから七緒は、自分からこの関係を終わらせる事にした。
あまりに惨めなこの状況に耐え切れず、逃げ出す事を選んだ。

「【まるで普段の口調で、何でもない事を話すかのように切り出す。
※ここからトラック終了まで、すべて申し訳なさそうにしつつ、どこか軽く。
主人公に自分を『こんな大切な話を唐突に切り出した上、大して悪びれてもいない、最低な女性である』と思わせたいので。
しかし、徹しきれない。本当はこんな話をしたくないし、主人公に嫌われたくないので。

その気持ちが出てしまい、あまり意地悪にも、冷たくもなりきれない。
なので、聞き手にも『何か理由があって、突然このような事を言い出したのではないか』
というのが伝わってしまう※】
あのね。急でごめんなさいなんですけど。
今日で会うの終わりにしましょう？
【ここの『すっごい』は特に強調しない】
短い間でしたけど、すっごい楽しかったです！」

〈主人公〉
「え……？
それ、どういう意味だ……？」

主人公がやっとの思いで聞き返すと、七緒が身体全体を傾けてこちらを見た。
その仕草は、どこかわざとらしい。
きょとんと目を見開いて片足で立ち、かすかに揺れながらこちらをじっとのぞき込んで。
まるで『私は今、あなたの質問が不思議でたまらない』『なぜそんな事を聞くのだろう？』
と、疑問に思っている』と、強調しているかのようだ。
だから主人公は、七緒が怖い。

今までの彼女は、自分にそのような態度を取った事がなかったからだ。

「【まるで普段の口調で。穏やかに回答する。
『どういう意味だ』と聞き返される事さえ不思議だ。という感じで】
ん？　言った通りの意味ですよ？
【申し訳なさそうにしつつ、どこか軽く。
『ごめんなさい。よくよく考えたら、これだけでは説明不足でしたね。では、補足します』という感じで。
『やっぱ違う』とは『やっぱり恋愛感情ではなかったようだ』という意味】
すいません。この半月位（はんつきくらい）一緒に居させてもらって。
ほんと楽しかったんですけど……やっぱ違うなぁって」

〈主人公〉
「……」

七緒が申し訳なさそうに眉を寄せ、その癖どこか軽い口調で答える。
主人公は信じられない。
今こんな話をしているのが七緒で、自分は今ふられているらしいという事実が、受け入

れられない。

「【落ち着いて補足する。

『あっ。こちらの件に関しても説明不足だった。申し訳ない』とでも言っているように。

ここの『最っ高』は特に強調しない。

七緒は今、主人公をできるだけ呆れさせ、冷たく突き放したい。

だから、きっぱりと『恋ではなかった』と言うべきだと思っている。なのに、それがどうしてもできない。あいまいな表現をして、自分に逃げ道を残してしまう】

あ。もちろん先輩は最っ高に素敵な方ですよ？

私、先輩の事大好きです。

でも、その気持ちが恋だったかっていうと、違ったかもなぁって。

【しれっと嘘をつく。

嘘と真実を組み合わせて、つじつま合わせをしようとする。

もちろんトラック０６での電話に、そのような意図はない】

実は昨日も、行くかどうか迷ってて。だから電話したんです」

〈主人公〉

「そんな……」

「【謝りはするが、どこか軽く。
まるでちょっとした、しかもすでに許されている事について謝るかのように。
やはり主人公が話す隙を与えず、主人公が話し始めようとする度に次の話題を出す】
へへ。ごめんなさい。
私、すごい夢見てたんでしょうね。
スマホ拾ってもらっただけなのに、運命とか思っちゃって。
【落ち着いて、丁寧に謝る。
先ほどとのギャップで、かえって聞き手と主人公を動揺させる。
これによって『ああ、これは本気で言っているのだ』と聞き手と主人公に理解させる】
そういう私の妄想に付き合わせて、お時間とらせて申し訳ありませんでした。
【『ちゃんとした家の子』とは涼羽のような女性を指している。
七緒はずっと、涼羽が羨ましくてたまらなかった。
裕福で、主人公と部活も趣味も一緒で。主人公の後輩でありながら、時には親友として対等に扱われ、時には本当の妹のように主人公に甘えている涼羽になりたかった。
もし自分が涼羽だったら、自分は何の心配もなくずっと主人公と一緒に居られる。
そう思い込む気持ちが、このセリフとなって表れる】
……それに先輩には、もっとちゃんとした家（いえ）の子の方（ほう）が合うと思うし。

【さらっと『最初からそのつもりだった事は知っているだろう？』と再確認させる。
実際は、どうにかしてこの嘘を説得力のあるものにしようとしているだけ。
その結果、またも無関係の別の出来事と組み合わせて、つじつま合わせをする】
後（あと）ほら、言ったじゃないですか。
私最初から、付き合って欲しいとか、返事欲しいって思ってる訳じゃないって」

〈主人公〉
「……そんな。確かにそう言ってた。言ってたけど……」

「【さらっと笑顔で、あっさり言う。
主人公が何か言いたげなのは無視する】
だから終わりにしましょ？
【どこか悲しげに。
主人公との日々はすべて『自分の身勝手な態度に振り回された主人公が、優しさゆえに仕方なく付き合ってくれていたからこそのもの』だと解釈しているので】
もう、私に親切にしなくていいんです。
【少し間をあけてから。
落ち着いて、丁寧に告げる。

やはり先ほどとのギャップで、かえって聞き手と主人公を動揺させる。
これによって『ああ、これは本気で言っているのだ』と聞き手と主人公に理解させる】
今までありがとうございました。
私の事、別に好きって訳でもないのに。
沢山一緒に居てくれて、幸せでした」

〈主人公〉
「……あ、あの。桐生……」

【とても優しく、穏やかに続きを促す】
うん？」

やっと絞り出した一言に、七緒が気味悪い位優しく相槌を打つ。
それはまるで、厄介な客を笑顔で追い出そうとしてるかのようで、主人公は深く傷つく。
それでも、とにかく何でもいい。
ここで会話を終わらせるのだけは、ダメな気がする。
そう思って、主人公は必死に言葉を紡いだ。

〈主人公〉
「あの、桐生」

「【優しく、しかし、少し不思議そうに。
なぜ主人公が誤るのかわからないので】
ん？」

〈主人公〉
「ごめん。本当に、ごめん……。
あの。わたし、桐生がそういう風に思うの、わかるよ。
それって。せっかく桐生がわたしの事を『いい』って思ってくれたのに。
わたしが桐生の想像よりつまんない奴だったり。
ちょっとした事でびっくりしたり、怒ったりして。
いつも変な態度とったりしてたからだよな？
本当に、ごめん。確かにこんなじゃ、桐生の言う通りって言うか。
桐生が呆れるのも無理ないと思ってる。
でも」

「【歯切れ悪く、申し訳なさそうに。
主人公の言葉を遮るように話し出す。
実際は、今にも泣きそうな主人公を見て、心が揺らいでいる。
何とか七緒を繋ぎとめようと必死で話している主人公を、抱きしめたいと思っている。
今ここで恥も外聞もなく発言を撤回して『ごめんなさい。全部嘘です。あなたの関心が私に向いていた訳ではないとわかって、悲しくて、衝動的に嘘を言ってしまいました』と打ち明ければ、今からでも元の関係に戻れるような気がしてしまう。
それに、そうすれば、主人公は確実に言う事を聞く。
これだけ動揺し、怯えているのだから、七緒が望めば、多少理不尽な要求も受け入れるだろうと感じる。
それはおそらく『交際してほしい』『ずっとそばにいて、自分を支えてほしい』という願いであっても同じだ。
どうしても主人公が欲しいなら、恋人になりたいのなら。
自分はぜひそうするべきだと感じる。
だが、いまさらそんな事ができるだろうかと思う。
そもそも、そうやって相手の感情を故意に揺さぶってコントロールしようとするなど、許される事ではない。そんな行為は、もはや暴力と同じだと感じる。
ゆえに、そうはせず、完全に主人公を突き放す。

主人公の事を、自分の前によく現れる『七緒の事をよく知りもせず、奇妙な幻想を抱いて告白してくる人』だと思おうとする。
ただそれでも『主人公に魅力がない』とは絶対に言えない。その嘘だけはつけない】
あー。ごめんなさい。そういう事じゃないんです。
先輩に悪いとこなんてありません。
でも……」

SE10　七緒のスマホの着信音
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【▲1　まで流し続ける】
【3コール目で『七緒』のセリフ】

その時、七緒のスマホが鳴る。
主人公は話が中断されてたじろぐが、七緒は特に何とも思っていないようだ。
当然のようにスマホを取り出すと、着信相手を確認している。

「【スマホの表示を見ながら言っている。

内心『助かった』と思っている。
表示名は、母親が入院している『ＫＧＩ医療センター』。おそらく、母親を担当している医師か、看護師がかけて来たのだろうと察する。
これを好機とし、さらに嘘を補強しようとする】
あ。私だ。
【『もう、困っちゃうんだから』という感じで。
まるで親しい人物が連絡してきたかのように演技する】
『用事ある』ってちゃんと言ったのになぁ。
【申し訳なさそうに。だが、有無を言わせない感じで。
まるで『これは主人公との会話よりも大切な電話だから』とでも言う感じで】
すいません。出ますね？」

〈主人公〉
「あっ。うん……」

▲1　ここでＳＥ１０がストップする。七緒が電話に出たので。

「【『まだぎこちないが、これから親しくなりそうな相手』と話しているふりをする。

電話の相手は、母親の担当看護師。手術に関する確認の電話である。
なので看護師から見て『とても愛想よく感じのいい、理想的な患者さんのご家族』として話す。
かつ、主人公には電話の相手が悟られないようにしたい。
なので、看護師に対して失礼でない範囲で、少しだけ親しげな素振りで返事をする】
……あ。桐生です！　ごめんなさい。すぐ出られなくて」

※ボイスなし
〈看護師〉
「あ、桐生さん。ごめんなさいね。用事があるって伺ってたのに。
今、少しだけ大丈夫？」

「【とても愛想よく、明るく、丁寧に。
看護師から見て『とても感じのいい、患者さんのご家族』として話す。
あえて『手術』という単語を使わず『月曜日の事』とぼかした表現にする事で、主人公を騙そうとする】
あ。はい。大丈夫です。
明後日。月曜日の事ですよね」

七緒が電話の相手と、親しげに話している。
主人公の存在をまるで無視して、会話を楽しんでいる。
それは仕方のない事のはずだ。
主人公にはこれを咎める権利などないし、このような場面でも出る電話なのだから、七緒にとって大切な時間なのだろう。
だけど主人公は今まで、このような場面に出くわした事がなかった。
主人公と居る時の七緒は、いつも主人公最優先で、電話になんて出た事なかった。
まれにメッセージアプリの返信をする時さえ、相手は誰だとか、このような用事で会話しているとかを、丁寧に教えてくれた気がする。
その度に主人公は大切にされている気がして嬉しかったし、そんな細かな所まで気遣ってくれる七緒を大好きだと思った。
でも、今はそうではない。主人公の気持ちが変わらなくても、七緒の態度はこれまでと違う。
それは、つまり――……。

※ボイスなし
〈看護師〉

「そう。手術当日の事で、確認しておきたい事があって……。
私、明日休みだから、今お話しできたらと思って。
こちらの都合で本当にごめんなさいね」

「【とても愛想よく、明るく、丁寧に。
看護師に対して失礼でない範囲で、少しだけ親しげな素振りで返事をする。
しかし内心では『やはり失礼な気がする。申し訳ない』『手術の話なのに不自然に態度が明るくて、不快な思いをさせやしないだろうか』と思っている】
はい。全然平気なんで。気にしないで下さい♪」

※ボイスなし
〈看護師〉
「まず、手術の時刻なんだけど。
予定は十時半からですが。前の手術があるので、変動の可能性もあると思って下さい。
そうね……だいぶ早くなっちゃうんだけど、九時半には来てもらえると助かります」

「【とても愛想よく、明るく、丁寧に。
看護師から見て『とても感じのいい、患者さんのご家族』として話す】

あ。はい。そうなんですね。大丈夫ですよ」

主人公の頬を、一筋の涙がつたう。
それを合図にして次々とあふれ出し、やがて止まらなくなる。
こんな風にしていても無駄だ。
これで七緒の気が引ける訳がないし、それどころかさらに困らせ、嫌な思いをさせるだけだろう。
それがわかっているのに、止められない。
受け入れられない現実を押し流そうとするかのように、ぼろぼろと涙がこぼれていく。

※ボイスなし
〈看護師〉
「病院に到着したら、これまで通り四階南棟のナースステーションの誰かに声をかけて下さい。これまで通り、お名前を言っていただくだけで大丈夫ですし、その後はデイルームでお待ちいただいて結構です」

「【穏やかに落ち着いて】
はい」

※ボイスなし
〈看護師〉
「じゃあ、月曜日はよろしくお願いします。失礼します」

「【穏やかに落ち着いて】
じゃあ、月曜はよろしくお願いします。
【まるで『電話の相手とは、明日も会う』かのような嘘をつく。
こんな発言をしたら看護師が不可解に思うのを承知で、嘘に巻き込む。
そして、そのまま電話を切る】
また明日」

七秒ほど沈黙。ＳＥ４の環境音だけが聞こえる。

七緒が『通話終了』のボタンをタップしようと、うつむく。
その顔は髪の毛で隠れて、よく見えなかった。
だけどすぐにボブヘアが風に揺れ、主人公は七緒と目が合う。

〈主人公〉
「――……」

それがあまりに綺麗だったから、主人公は言葉を失う。
何か言うべきはずだった唇が動かず、代わりに数秒間、涙を流したまま七緒を見ていた。

【穏やかに、申し訳なさそうに】
すいません。お待たせして。
【穏やかに落ち着いて。
普段と変わらないようで、どこかそっけない態度で。
あえて『まだ何かありますか』つまり『まだ何か話したい事はあったか』という、冷たい聞き方をする事で、主人公を決定的に突き放す】
で、何（なん）でしたっけ。まだ何（なに）かありますか？」

〈主人公〉
「……あ。あ……」

【優しく苦笑いして】

ないですよね。
【穏やかに落ち着いて。
『ここで自分が優しく促せば、主人公はちゃんと自分の意見が言えるだろう』とわかっている。
だが、しない。『もう話したい事などない』とみなして、一方的に打ち切る】
じゃあ、そういう事なんで。
帰りは別々に帰りましょっか」
初めて会った日と同じように、七緒がこちらを見る。
「【優しく苦笑いして。
主人公が泣いている事については、とっくに気づいていたので。
七緒にとって、主人公の涙は正直不可解だ。
だが『さすがに、自分を好きだと言っていた人間を手放すのは惜しいし、目の前で振られるのはこたえるようだ』と解釈する】
もう、私と居たくないですよね？」
穏やかに微笑んで『これからこうしよう』と提案してくれる。

「【穏やかに落ち着いて】
先輩。今までありがとうございました。
大好きでしたよ」

主人公のした事に『ありがとう』と『好きだ』と言ってくれる。
こんな所まで、あの日と同じなのに。

SE11　七緒の足音2
【最初から最後まで流す】

※ボイス加工あり
【少し遠くで聞こえる】
「【明るくあっさりと】
さよなら！」

七緒はもう、主人公と歩いてくれない。
呆然と何もできずにいる主人公を見て、あの少し意地悪で、でも温かみのある声で『先

輩』と呼びかけてくれる事はないのだ。
この現実を受け入れられず、かといって追いかける事も出来ず。
その背中が消えてしまうまで、主人公は去り行く七緒を眺めていた。

ここでフェードアウトして終了。